

## 陽明学関係書 紹介と短評

### ○吉田和男著『現代に甦る陽明学』

—『伝習録』(巻の上)を読む—桜下塾講義録

平成十八年四月第一刷 B 6版 318頁麗澤大学出版会刊

吉田和男先生の著書については、本誌第12号(2000年)に『桜の下の陽明学』を紹介した。京都東山にある桜下塾で、毎月第一土曜に『伝習録』の輪読・読解をして上巻を読み終わったところで、それまでに講じたものをまとめたのが本書である。

本書は、第二章の「格物」から始まる、「良知」「心即理」「天理人欲」「知行合一」「事上磨錬」「万物一体の仁」という七つのキーワードについて、それぞれの意味するものを、その語自体の持つ意味から、現代に生かす意味までを読みとるといふ立場から読んだもので、そのキーワードがどのような時と場所と場合とに生きるかを、分かりやすく説いている。

「良知」に述べるところから少し抄出すると、「王陽明の思想内容を一言で言えば、すべての人はこの良知をすでに持っているが、人欲・物欲がそれを覆い隠しているので、人は良知を発揮し得ないのだ、ということです。」(P 88)と述べ、従ってこの良知を得るために、王陽明は人欲を排し、実践を強調することに關し、塾生と議論したことを次のように述べている。「ただ良知だけですべてがわかるのかという点について、私も桜下塾でもよく議論しました……実践の

理と科学としての理は違うのではないか、また、前者は倫理の理であり、後者は論理の理ではないかとも議論しました。心の良知にしたがって行動することは理解できても、その良知とは何か、良知を磨くのはどうしたらよいかを修得するのはなかなか難しいことです。」(P 97)というように説き進めています。

今日、このような陽明学の考えが、現在の社会では殆ど聞かれることがないだけでなく、問題にもしなくなっているが、陽明学が教える心こそ、現在の日本が忘れているものだと言はう。そして本書を執筆したのは、「伝統的な儒学のあり方としての陽明学を日本に再び甦らせることが必要であると考えたからでした」(「あとがき」と述べられているところに表れています。そして「陽明学を通じて現代の精神を考える書」として読んでほしいと結んでいます。

### ○小島 毅著『近代日本の陽明学』(講談社メチエ 369)

二〇〇六年八月初版 講談社 B 6版 231頁

まず最初に小泉前首相の靖国神社参拝の話から始まるように、陽明学について学ぼうなどと思つて本書を手にとつたものは先ず驚かされる。そして靖国神社は儒教教義に基づく社で、神道の宗教施設ではないという。そしてこれに關して、水戸学や武士道がとりあげられ、そこに陽明学がからまつて説かれているのである。

このように、従来の陽明学に対する認識をもって読み始めると、このような切り口もあるのかと、既成の陽明学を当然のものと考えている者には驚きと違和感と反省させられる面のあることは私だけではないでしょう。